

インタビュー 成瀬 治氏に聞く。

去る一月二十八日、クリオ編集部は、東大西洋史学科教授で、ドイツ近世史専攻の成瀬治氏にお話を伺う機会を得た。

氏は早くから、ドイツを中心とした西ヨーロッパ各国間の比較史的方法に注目され、ヨーロッパ近代政治思想史、および、官僚制に焦点を当てた近世国制史の領域において、広い視野に立った研究を進めて来られた。またその他にも、キリスト教思想史、ドイツロマン派、さらにはわが国の戦後歴史学の歩みなど、非常に多方面にわたっての興味を持ち続けておられる。近著『近代市民社会の成立』（東大出版会）は、大きな反響を呼んだ。

今回は、氏が西洋史の研究を始められた昭和二十四年当時の社会情勢から、今日歴史学の立たされている状況まで、バラエティーに富んだお話を賜ることができた。その内容もさることながら、氏の語り口の端々に、気さくで心優しいお人柄がほの見えるインタビューとなった。（1986年一月二十八日・東京本郷喫茶店「ルオー」にて。聞き手 東大大学院 西洋史 橋場 弦）

1. 『大学一年の頃はキリスト教に関心が』

クリオ：先生が卒論をお書きになったのは……

成瀬：昭和二十四年ですから1949年です。

ク：その頃は、いわゆる戦後歴史学がさかんに興って来た時代といえましょうか。

成：そうですね。卒論を書いた年というのは、三鷹事件とか下山事件とか、いわゆる三大事件が起こった年で、世の中騒然としていて…。私の同学年では、初代の全学連の委員長 武井昭夫君てのが西洋史にいて、僕らは先輩にアジられたり、（西洋史の）中からアジられたりして、村川（堅太郎）先生の家ヘストの支援を頼みに行ったりして…。それから出隆教授が共産党から立候補した、そんな時代ですからね。いやでも政治的関心は持たざるを得なかったのです。

ク：当時は、敗戦という大きな共同体験からいわゆる近代化とか近代的人間像の追求といった問題意識—大塚史学などもそこから出発するわけですが—そういう問題意識が当時としてはかなりメジャーだったと思いますが、先生ご自身の当時の問題意識は、やはりそのような近代化の問題とつながっていたと見てよろしいでしょうか。

成：そうですね、大塚さんとか高橋（幸八郎）先生とか、そういう方の講義を私は聞いたわけではないのです。むしろそういう点では私は、オクテでしてね。社会経済史の方で勉強している友達はいましたけども、僕はちょっとそこから距離をおいていた。

ただ、卒論で取上げた問題というのは、やはり政治思想史の上でドイツの近代化というのを、フランス革命との出会いでどういう風になっているかという関心があったから、やっぱり広い主題としては、近代化という問題ではどうしてもあった。ただその場合に、ドイツのことだけを見ていたのではだめで、さしあたり英仏とくらべてドイツはどんなのかという事を（把握するという）英仏独という構図が、卒論の時に既に出来ていた。というのは、エドモンド・バークのフランス革命論というのがありましてね。あれ

は、イギリスの自由主義の立場からフランス革命のラディカリズムを批判しているんですけど、僕が卒論で取上げたのはそのパークのフランス革命論をさらにドイツ語訳してドイツに紹介した人間なんですよ、ゲンツという。それやれば、否応なしにパークそのものの原書も読まねばならなかったし、フランス革命について知識もなけりゃいけなかったし。そういう意味でドイツ史だけをやったというよりは、その頃から比較史の意識というのが、自ずと養われていたように今は思います。

ク：先生がそこで当時追及なされようとしていた問題意識と、その時代において先生をとりまいていた「政治の季節」とも言うべき状況—先ほど全学連やストの話がでましたが一とは、なにか共通するものがありましたか？

成：僕は直接にはちょっとつながらないと思いますよ。私は、卒論は結局そういうテーマにおちついたと言いましたけどね。大学一年の頃はむしろキリスト教に関心があったですね。

ク：はあ

成：一年の時に教会へ行くようになって洗礼も受けたりして、村川先生とは当時お家も近かったんですけどね、先生が、教会とセクトなんかの社会理論についてのトレルチの著作集の第一巻、それおもしろいとおっしゃるんで、それを図書館に毎日通って読んでた。その頃は（成瀬氏が）キリスト教思想史のような方向へ行くんじゃないかと先生も思っておられたんですけど。それがどうしてその（笑）フランス革命みたいな方面に変わったかというのは、もう一つ、ドイツのロマン派にねえ、興味を持ってたんですよ。それは高等学校以来。

ま、ドイツの近代思想の系譜をたどっていくと必ずドイッチェ・ロマンティークというものを見なきゃ、西欧と比較した場合、わかんないとおもうんすよね。それから僕、林（健太郎）先生のゼミのレポートで、一回『ドイツ・ロマン派小論』という、偉そうな名前を出したことがありますけれど。それから、私はいろんな事情がありまして、親父（無極成瀬清氏）の手伝いをしてですね、シュライエルマッハーという、これはロマン派の宗教家なんですけど、その人のもの（作品）の解説を書いたことがあるんですよ、学生のくせに。そういうわけで、ディルタイのシュライエルマッハー伝とかを読んでいるうちに、ロマン派の時代というものに興味が移って行ったんだと思いますよ。初めはもっとこう、中世とか、せいぜいリフォーメーションのことを考えていたんですけども。

ですから、私の順序としては、最初そういうキリスト教思想史があって、そのうちロマン派とその時代に興味が行って。けどもその、初め興味を持っていたキリスト教思想についての関心はその後も何か底流として残ったんすよ。だから後に北大に行ってから、マルチン・ルターなんて書いているでしょ。今でももってるんすよ、そういう（興味は）。

何ていうか、僕のトーンに、三つくらい流れがあるかも知れませんよ。一つは、そういうキリスト教思想史でしょ。二つめが近代化を含めての政治思想史ですね、ドイツを中心とした比較史的な。

それから第三番目というのは、もう少し国制史とか言ったような、身分制とかそういう問題ですね。それは北大に行ってから特に強くなったんですよ。

それは必要に迫られた事もあるんすよ。その……、北大に赴任したら私ともう一人し

か先生がいなかった。その先生が秋からやめちゃってね、僕は一人になった（笑）。西洋史学科は一人でやってかなイカン。つまり、古代史はどうしようもないとして、中世から近世まで一人で面倒みなきゃいかんので、堀米（庸三）さんが育てた大学院生とか助手とかOB、そういう人たちが出てくるゼミでね、中世史もやらなくちゃいけないという苦しい立場に置かれて。それで中世から近世へと連続的に歴史が発展して来る—それは当然のことですけど—そういうふうにももの見方が自然にできちゃったんですね。

つまり、私は近世史だから中世史は知らんとか、逆に自己完結的な中世史とかいうのは、僕はあり得ないと思う。少なくともアンシャン・レジームまでは続いていると思うんですね。

私の持論はね、時間的關係でいうと、中世史と近世史を切り離さないということ、それから空間的には、少なくとも英独仏の比較史で、ヨーロッパの枠の中で見ないと、一国史だけを切り離して見る事は、不可能なんじゃないか、という気がするんですよ。ですから私の場合、気がつかれるでしょうけど、本当は現代史が不得手なんです。むしろ近世から後ろ（過去）へつながっている。そこを何とか自分でも、ドイツ史やってて近現代史が手うすだっちゃんのは恥ずかしいから、むしろ東大に赴任してから勉強してるようなわけで。

ク：そうしますと、先生の研究の方向は、既に言われた三つの流れ、つまりキリスト教思想史、政治思想史そして国制史、ということになりましょうが、現在までそういった方向で研究を進められていると考えるとよろしいでしょうか。

成：そうですね、その三つのうちのどれが前面に出てくるかは時によってちがうんですけどね。でも、国立大学で講義するという必要から言うとキリスト教思想史なんかを前にもって来るわけにはいかないんですよ。ですから、言ってみれば、それは余技、と言うと変ですけど。たとえば、『森有正記念論文集』なんかに寄稿する時は、キリスト教思想史に関する論文を書くト。

2. 『構造史的発想』

クリオ：ちょっと話の方向が変わりますけれども、だいぶ以前に先生が『世界史の意識と理論』を書かれて……

成瀬：77年ですね。

ク：そこにも書かれている戦後歴史学の流れ、つまり、初めに先に言った近代化という問題意識が主としてあって、その中で大きな柱としては大塚史学があった。それが、ある時点から—大ざっぱに言って60年代ごろからと言っていいんでしょうか—近代化の追求という問題意識に反省がなされてそれ以降の問題関心が多極化したと言えましょう。そういう大きな戦後歴史学のトレンドの中で、先生御自身の研究を位置づけるとすれば、どうなるでしょうか。

成：私の場合には、マックス＝ウェーバーの家産制という理論が、私の身分制社会についての研究の中で占めている位置が大きいです。世良（晃志郎）さんが訳されている『支配の社会学』、あれは訳される前からかなり読んでいましてね。それと連関して、オットー・ヒンツェという人のものを北大時代ずいぶんよんだんすね。その二つとも、

まあ、大塚さんの問題のたてかたとは全く切れてるわけじゃないですよ。ウェーバーを問題にしているという事は、大塚さんの（問題の）たてかたとつながっていることにはなるんですけど、私の場合、前近代的要素が近代に入っても構造的にかなり維持されているっていう、古いものの残存について関心がつよいわけですね。

大塚さんの問題のたてかたは、あたらしいものがいつでてくるか、つまり、資本主義的な関係はいつから出るか、その資本主義の系譜をたどるということがありましょ。そういう点で私の場合ちょっと逆の関係になっているト。このごろの言葉で言直せば「構造史的」なんですね。ええ。大塚さんの「発生史的」な考えかたに対して。でもそういう考えかたは、北大に赴任したころから、そのウェーバーやヒンツェに対する関心は急激に増大してきたんです。だから大塚さんたちのお仕事が進んで重心が産業革命の方に移動したりする頃には、僕はそっちの方の動きは、まあ横目で見てるくらいで。直接には北大の雰囲気には、堀米さんの遺産もあって法制史的な見方の方が多かったし、私の協同研究のテーマも、身分制と官僚制とかね、そういう国制史の方にかたよってましたので。経済史は中心になかったですね。関心は持ってたんですよ。それと、私のあと遅塚さんを（北大に）呼んだでしょ。そういう意味で刺激はありましたけどね。

余談みたいだけど、『世界史の意識と理論』をそのものとして読むとね、私がおう大塚・高橋史学に最初からものすごく興味をもってたかのごとくに思われるけれど、それはあとからそうなったんであってね。周りの人が、少し大塚史学、ありゃダメだなんて言い出した頃ね、大塚史学に非常に関心をもって、と同時に、高く評価するようになったんスよ。不思議なこってすけど。

ク：大塚さんの発生史的な行き方というのは、敗戦後の日本を、どうやったら真に近代化すべきかという、当時の時代的要請とよく適合していたと思われませんが、他方成瀬先生の、発生史的な行き方とは逆の発想には、何かそのような時代的要請みたいなものが何か関与しているのでしょうか。

成：それはね、最初からそこが私の出発点では決してないんだけど、いわゆる講座派的考え方というのがあって、それはどちらかというと、資本主義が高度に発展していてもそれが古い構造と結びついてるところを強調したわけですね。ま、大塚さんだって敗戦まではアンシャン・レジームだなんて言ってるんですから。しかも、土地改革があったけども、まだ日本人のメンタリティーとか、古いものが残っていたと言われるでしょう。僕はむしろ、そう一挙に世の中というのは新しく変わらないものがあるんだト。そういう点に歴史家として興味を引かれたんだと思いますね。ええ。あんまり発展段階をきちっとわり切っちゃうとね、何か機械論みたいになっちゃう。

ただ私は、そうかと言って、自分がクリスト教だからと言ってですね、南原 繁さんなんか言っていた人間改革論、ああいうものには興味がなかった。つまり人間を変革しなきゃ革命はできないという、そういう発想はしなかった。もっとそのパーソナルなものを越えた、構造的なものを問題にしたかった。

ク：多少脱線しますが、敗戦後40年を経た今日、そういった古い日本人的なメンタリティーといったものは、今から見ると殆んど動かされないままで、これほどジャパン・アズ・ナンバーワンと言えるかどうかわかりませんが、ほとんど世界のトップクラスにまで日本がのし上がってしまいました。そういう視点から見ると、そのような、古いものとの構造的な結びつきを問題にしなければ日本の近代化はあり得ないと言ったよ

うな問の立て方自体が有効性を失ってしまったように思われます。この点どのように考えられますか。

成：高度経済成長以後の経済現象だけみるとね、それは世界のトップをいつているかもしれないけど、いわゆる政界とか、それから変な話だけど創価学会みたいな新興宗教などに非常に多くの人たちが動員されているという現象や、その他統一原理にしてもそうですけど、何か、とても近代的とは言えないものが、まだまだブキミに生きてるじゃないかっていう気がしてしょうがないんですよ。それと最新流行の洋服とがちぐはぐになっているようなところがある。

ク：それをちぐはぐ（不均衡）とみる見方もあれば、ある見方からすればちぐはぐであるように見えて、実は非常に調和がとれていると見られないこともないですよ。

成：あるいはそのような不均等がどこにでもあると、社会主義国にもあると言ってしまえばそうでしょうね。

ただ、どうしても僕は西洋史をやっている、日本人だっっちゃう事や、日本の特殊性とかいう事をたえず念頭に置いているようなところがあって、それを直かに学問の方に出さないだけで……。むしろ、比較史と言ってもヨーロッパの中を比較しているのであって、日本と一足とびにドイツとかねフランスとかを比較するというのは、戦後の比較史というのはそういうものだったけど、僕はどうもそれになかなかついてゆけなかった。もう一つ、封建制でもって、法制史で日本と西欧を比較するというのは、テーマとしちゃ面白いけどね、僕はむしろヒンツェのように、ヨーロッパの中で類型を作ってゆくとか、そういう手順がもう一つないとね、急にあるヨーロッパの一国と日本を比較して、それで学問が成りたつかという、それはちょっと非常に独断的じゃないかと。ヨーロッパの中にもいろんなものがあるんで。

3. 『いい意味で政治的でありたい』

クリオ：これは歴史学固有の問題とはかけはなれるのですが、さき程の近代化という問題関心について言えば、日本の古い構造なり体質なりを改めなくては近代化はなりたたんという見方もあれば、他方、日本がその古い構造と結びつきたままでそれ自体のリズムを持って動いているのだと見る見方の二通りがあると思われませんが、

さき程の政治的体質という局面についてでも結構ですが、このどちらの方向を、これからとってゆくべきなのか、これは歴史学者というよりも、一人の社会人ないし知識人としての先生にお聞きしたいのですが。

成瀬：そうですね、何か今の日本の政界が古いから例えばイギリスをまねしろとか、ヨーロッパの国を尺度にしてそれに近づけようというのは無意味な気がするんですよ。やはり我々としての近代化と呼んでいいものがあるにしても、それはヨーロッパ人のそのの復習じゃないわけですよ。

そういう意味で、僕はだいぶ前から言われている多元的なものの見方、今は文化人類学が取り入れている、そういう意味の、近代化にもいろんなコース・タイプがありうるという考えの方が、魅力ありますね。なにかものさしを向こう（ヨーロッパ）に決めておいて、それからどれだけ遅れているという単線発展論ではどうしようもないと思います。

まあしかし、政治の問題については僕はいつもベシミスティックですね。でもトーマ

ス・マンがね、「政治を軽蔑する人間は、軽蔑すべき政治しかもてない」といっていて、それは僕がいつも言いたい言葉でして、いい意味で自分も政治的でありたいと願うくらいのところはありますよ。

4. 『ポリティカルなものが歴史を結集する』

クリオ：話は変わりますが、現在置かれている歴史学の状況ですが、今後これからの歴史学をどういう方向に持ってゆくべきかという点について、どのような展望をお持ちでしょうか。

成瀬：具体的に言うと、西洋史の研究の発達というか、進歩というか、それは僕らの学生の頃から見ると、技術的な面で非常に水準が上がって来ているんですよ。特に、史料の扱い方なんかは、我々の頃にくらべちゃ非常に緻密になっていて、そういうのは進歩だし、ミクロの次元では大変細かい研究がヨーロッパでも行われて来ているけど、僕はもう一つ今欠けているのは、マクロ的な捉え方がもっとあっていいんじゃないかと思うんですよ。さっきの比較史もそうですけど。だんだん問題の設定が細かくなってきたためにアナルシーが生じてきてまとまりがつかない。人が何をやっているのか理解できないでしょ。全体との関係で自分の仕事を位置づけることをやってればそういう事はない筈なんですけど、しかし目前のことに追われて、人はどうしようが勝手に自分はやっていくんだという事になるとね、何かこう歴史学の社会的存在理由なんてもなくなるとゆくんじゃないかと。その中だけでわかる符牒で話し合っている……。

ク：その通りですね。ハイ。

成：そういう意味じゃ、やっぱり僕は、時々言うんですけど、どんなに社会経済史やろうと何史をやろうと、政治史の領域ちゅうものを—社会史はとかく軽蔑するけどね—大きい意味でポリティカルなものが歴史を結集しているようなところがあると思う、いろいろ文化的領域もすべて含めて。だからアポリティッシュになってゆくというのは、歴史学としては健全じゃないと、少なくともそう思っている。

ただし、私は一言社会史について評価をさせてもらうなら、僕の考えでは日本では少なくもね、戦後歴史学の中の経済史あるいは社会経済史ってものは、あまりにも経済的に狭かったと思う。だから経済外的な要素というものが、ずいぶんドロップしていて、そういう経済外的な人間の諸関係を総括して社会と呼べば、社会史は経済外的なものを取り入れた全体史だという感じになってきますね。その意味じゃ、極端にひろげれば、心性、マンタリテなんか入ってくるし、もう心性まで来ると殆んど政治につながって行くんですよ、これね。政治っていうものは人間の心的なものとの関係があるから。まあそういう意味では、問題の設定をひろげたという意味で、社会史は面白いと思うけど。

ただ、『アナール』の論文をいろいろ翻訳したり紹介されても、日本人としてできることはね、ヨーロッパに関して日本人があの意味のアナールの研究ができるかということ、史料的な面で無理じゃないかと思う。向こうにもう長く住みついたらとかね、フィールドワークするとかいうなら別ですけど、たとえば網野（善彦）さんのように、日本でも民俗史料が一杯あるところでやるのはいいけど。阿部謹也さんは僕は非常に頭のいい人だと思うけど、ちゃんと自分のできる範囲を設定してね。学術的な研究は非常にフィロローギッシュですよ、あの人の場合は。それと歴史叙述とを（阿部氏は）区別し

ている。

ク：確かに、さきほど言われた通り、各専門領域のジャーゴンに各人がとじこもるアナルシーの状況を打開して、新たなる「全体」の視点に立つことが要求される事は事実でしょうし、現に「全体史的立場に立て」ということはかなり前から言われています。しかし、ではその「全体的視点」をどこに置くか、という論点に関しては—先生御自身はそれにポリティカルなものを据えようというお考えですが—今日全くまとまりを見ない状況にあると思われます。これは、一つには、40年前には敗戦という、当時の日本人にとってかなり普遍的と言ってよい共同体験が重みを持っていて、「何故日本は敗けたんだらう」という問題意識が、そういった全体的視点をまとめる上で大きな役割を果たしていたと思われるのですが、現在にはそのような普遍的共同体験が欠如している、その欠如が、今日のアナルシーの原因の一つであると思われるのですが。

成：ええ、それは今40年とおっしゃったように、殆んど半世紀近くの過去を経てしまっているのですから、今さら戦争を持ち出したって……

ク：しょうがないでしょうね。これは追体験しろと言われても限度がありますから。

成：ただ、もう60年代後半から出て来た、いわゆる南北問題、第三世界問題、あれは、戦後歴史学に無かったものですよ。ああいうものは、今の文化人類学の興隆と関係あると思いますけども、なかなかそれをこう、ヨーロッパの中で発展してきた歴史学と接合するちゅうのはむづかしいっすよ。とつてもむづかしい。僕自身正直言ってねえ、古い時代の歴史学の修練を受けているから、とても今、例えば山川出版社の『民族の世界史』なんかで、ちょっと僕はついていけないですねえ、この発想の転換・パラダイムの転換だかが、あまりにラディカルでね。ヨーロッパの深層にケルトがあるなんて言われても（笑）僕はちょっとわかんないスよ（笑）。それは向こうに長くすんでみてね、実感すればあれだけど、日本のどっかの料理屋でそんな事を論じあっても（笑）、……、それは趣味としては面白いけど。それより、東京外語の川田順造さんが、アフリカの現地の音楽なんか録音したレコードがあるンすけど、ああいう音楽という普遍的な、言語がいらなくて媒介できるようなね、そういうメディアを通じての第三世界の理解というのは、僕はありうるんじゃないかと思う。

歴史学ちゅうのは、宿命的に言葉ですからね、そこに非常に史料の上での限界があるんだと思いますよ。

ク：歴史学、あるいは西洋史学でもよろしいんですが、さきほど先生もおっしゃったその社会的存在理由とでも申しましょうか、それがどこにあるのかという点については……。

成：西洋史というのは広い意味では洋学の一部ですから、西洋文学なんかをやっている人と共通の課題があるんだらうと思いますけど。ええ、何ていうんですかね、この、僕の場合はどうもアメリカが抜け落ちてるんですが、日本の中にあるヨーロッパ的なものを、ただ漠然と意識してるのではなくて、もう少し明確に、正確にしてみたいト。現在日本文化にもうなっちゃってるヨーロッパ的要素ってものの根源を知りたいという、それはもう知的要求ですよ。

ク：それは一種いってみれば、幕末（の洋学）からの問題関心ですね。

成：はい。

僕はそれで、例えば西洋史に仮に来なかったとしたら、何を選んだら、と言ったら、僕はひょっとしたら言語学を選んだかも知れません。それぐらい言語現象に興味を持っているんですよ。言語の意味論というのかねえ、今でもアマチュア的意味で好きですけど。一つのキーワードのようなものをさかのぼって行って、もとはどういう意味から出てるかと言う、そういうものを通じて、ある事柄をどこから切り込んでいけばいいのかというところがバツとわかってくるのが時々ある。

この間亡くなられた木村彰一さんが、本当に教養というものをもとうと思ったら、日本語も含めて言語というものに興味をもたなくてはいけないと言われたことが、僕は身にしみてるんですよ。これは一生の課題だと思うんですよ。だから今でも僕はなるべくどん欲にいろんな種類の言葉を一生涯勉強してゆきたいと思うんですよ。

5. 『歴史学は危険な学問にも……』

クリオ：これまでは歴史学内部の問題についての質問でしたが、諸々の学問の中の歴史学を見た場合歴史学は有用な学問でしょうか、それとも無用なものでしょうか。

成瀬：危険な学問という言い方もできますよ。つまり戦前の皇国史観というものがあってでしょ。それを批判しなきゃいけない歴史家たちが黙っていることで身の安全を保ったために、僕らは小学校中学校で全くまちがった歴史をおそわっていて、それが全く日本の国策にそっていたわけだから。戦前の国民教育の中で、歴史教育というのは大変大きな位置を占めてますね。そういう意味で「有用」だったわけですよ。

ク：ある意味で「有用」。

成：危険な意味で有用。ですからそういうインチキな歴史にとってかわる、これが歴史だというものを出すことは、裏側から言って有用なんじゃないスか。

歴史教育は、ポリスの、国民の教育なんでしょうね、高度の。だからいろんな学問があるけど、科学史なんかは歴史の一部を構成するとすれば、歴史学は大変広いものをカバーしてる国民教育の領域であってね。だから何も大学の史学科だけでやっている事が歴史学の全部ではどうていなくて、とにかくインチキ歴史学ていうのを追放しなくちゃ、どんなことになるのかわからない。

ク：成瀬先生の世代のあたりでは、その種の使命感を以て学問にのぞまれた方は結構多いのでしょうか。

成：亡くなった堀米さんははっきり（歴史学を）虚学としてすすめていたんですけどね。

成：それでは堀米先生のように、歴史学を虚学とする人々は、いったい何のために歴史学をやっているわけでしょう。

成：そういう人は、極端に言えばファンタジーや芸術の世界とつながりを持ってくるんですよ。だから人間・ヒューマニティという事を重んじていすぎるためにね、実学は次元の低いものだということになるんで。本当に人間らしい教育ちゅうのは虚（学）の方にがあると（笑）。そう逆説的に思ってるんじゃないですか。

ク：やはり何らかの意味で有用であると。

成：そうなんすよ。アイデアは虚ですから。

ク：成瀬先生御自身は、実際に仕事をなさっていて、こういうことのためにやってい

るんだというような、使命感のようなものをお感じになることはありますか。

成：（笑）照れくさいですね、こりゃ。

でもまあ、去年の11月、岩手県の釜石に呼ばれてね、高校の社会科の先生方の前で講演したけど、『宗教改革と近代』というような（題目で）。その場合、僕なりに一生懸命しゃべってますよ（笑）。つまり、正しい意味で僕の理解している宗教改革をわかってほしいト。その熱意は伝わったらしかったスよ。ええ。

つまり、教科書に書いてあることはスペースが限られているせいもあるんだけど、非常におざなりなんですよ、どうしても。もう一步ふみこんだ、高度の概説というような、教科書や一般向けの興味本位の『世界の歴史』みたいなものと、他方とても専門家しか理解できないような論文との中間の、学問的に読むにたえるような概説書というのは少ないでしょ。それは非常に今の日本の学界の両極分解だと思いますよ。中間の堅実な概説書が無い。だって岩波講座『世界歴史』とかいうのは論文集みたいじゃないスか（笑）。

ク：僕は学部学生の頃、あれ読めば世界史がわかるかと思ったら、何にもわからなかった（笑）。

成：（笑）一貫した構想が何もありませんね。

ク：話は飛びますが、学問はそれが有用である限りにおいてやるべきである、その限度を越えると人間の一生を費やしてしまうからというソクラテスの言葉がありますが、こういう意見に対してはどうお考えですか。

成：僕はまず自分のキャパシティーを考えてしまう。自分の包摂可能な知識の領域は時間的にも限られてしまうし。

僕は英雄的人間じゃきつとないんだろけど、マックス＝ウェーバーのようなえらい人は、それぞれの仕事がトルソーで終わってるんですよ。完結していないんです。それでも英雄的にあれだけのものに向かっていったというのは、ああいう人はキャパシティーが極端に大きな人だと思いますね、僕なんかそういう意味じゃ、限られたところでごめいている（笑）。

ただ知的好奇心みたいなものを失いたくないですね。いろんな方面に。ただその一面、僕は流行現象みたいなものに疑ってかかる面があつて。社会史のある領域についてもそういう意味で用心してるんですけど。

6. 『着想が浮かぶとうれしいスよ』

クリオ：一番最後になりますが、ごく日常的な場面を設定していただいて、例えば仕事場で仕事なさっているときに、この仕事をやっていてよかったなと感じられる時は、どんなときでしょうか。仕事の欝びと申しましょうか…。

成瀬：そうですねえ…。筆が自然に動いて10ページ以上あとの方まで頭の中でわいてきているような状況ちゅうのが…。ただそれがね。東京に暮らしていると気が散ってね、なかなか…。僕は戸隠に数年前から夏に行っていて、戸隠のような静かな高原にいますとそういううれしい状態がよく起きるですね。もう東京の一週間分位一日でできちゃう。それからまあ、頭の活性化がね、東京の排気ガスの中で眠りこんじゃっていたのがいっせいに動きだして、いろんな観念連合が自然に出来てくるとか。

歴史学の研究では着眼点とか切口をどこにつくるかというのは割合に大事ですよ。だからそういう静かな所にいると、ワートと着想がうかぶことがあるンすよ。そういう時はうれしいスよ。それをメモしておくとかね。

ク：じゃあそういう充実感というのは、一般的な意味での精神的創造の歓びと言っていいんでしょうか。

成：そうですね。まあ、えばったような事を言えば、これはオレにしか書けないぞというようなことを、書いていて思うとうれしいスよ。そのかわり、だからオレが書かないといけないんだと思うとき、ありますよ。

『世界史の意識と理論』ですけど、僕はあれイヤでイヤでしょうがないのをおしつけられたンすけど、苦しんで書いてたンすけどね、でも時々まあ、オレの世代のもんがこういうもの書いておかないとイカンのだなというような、使命感みたいなもので、やっともったというかな。

ク：ではこのへんで、どうもありがとうございました。

成：いえいえ、とんでもない。

ク：まだ時間はちょっとあるみたいですけど……。

成：ええ。まあ、学士会館に行って、五目並べでもしてまじょうか（笑）。

[おわり]

